

明治三〇年北海道泊村(田中家)における

『鯨漁場』の想定復元

建築復元 監修・遠藤明久 大林組プロジェクトチーム
産業復元 真島俊一・TEM研究所

わが国の沿岸漁業のもっとも華やかだった時代を代表する鯨漁。江戸期から昭和の前半まで、北海道の西海岸に押し寄せる鯨の大群をめぐる男たちの興亡は、いまや伝説的ですらある。三月から五月までのわずかな期間の漁で一年を暮らす、特殊な経営形態をもつ産業でもあった鯨漁とは、いったい何だったのだろうか。

今回、『季刊大林』では、北海道開拓史に大きな足跡を残した鯨漁に着目し、最盛期であった明治中期に屈指の漁業主として活躍した田中家の「漁場」の復元に挑戦した。鯨漁の象徴的存在といえる鯨御殿の復元を、北海道工業大学名誉教授の遠藤明久氏の協力を得て大林組プロジェクトチームが担当し、また産業面の復元については真島俊一氏が率いるTEM研究所が担当した。



鯨御殿(旧田中家・番屋)の復元

一、田中家と鯨

小樽市祝津町の北の一角、日和山灯台がそびえる高島岬の傾斜地に、ひととき大きな木造建造物がある。昭和三十三年、この地に移築された、かつての漁業主・田中家の「鯨御殿」である。

現在、歴史的建造物として知られる鯨御殿は、北海道では昔から鯨番屋と呼ばれ、鯨漁のシンボルともいえる建築であった(そこで以下、鯨番屋と呼ぶ)。その中で、祝津に保存されているこの鯨番屋は、もともと積丹半島の西海岸の泊村にあり、積丹沿岸地方有数の漁業主のひとつであった田中家が、勇壮な鯨漁を展開した明治期に建てたものであった。明治二六年発行の『図入北海立志編』には、田中家が漁業主となった経緯が記されている。漁業主としての初代・田中福松氏は、安政元年(一八五四)年、一七歳の時に青森県東津軽郡から叔父(北海道古宇郡・古宇場所支配人)を頼って渡道し、いわゆる雇漁夫(ヤン衆)として働いたのち、場所(漁場)を買って漁業主(経営者)となった人物である。途中、台風被害を受け経営難にも見舞われたが、折からの鯨の豊漁に恵まれ、個人的な漁法である刺網から建網(大型の定置網漁業)へと漁業規模を拡張していった。そして明治中期には、四場所を所有し、建網一四カ統(一カ統は三五〇人規模)を営み、漁獲高一万石(七五〇〇トン)を記録する積丹地方の代表的な漁業主となったのである。故郷の青森県東津軽郡に、水田一〇万坪、山林数町、さらに数棟の倉庫を擁する居宅を構えたほどの成功は、まさに鯨大尽と呼ばれるにふさわしい。

その絶頂期にあった明治三〇年、田中家は泊村照

とりわけ北海道の鯨番屋には、豪壮な建築が数多くみられる。全国に知られた鯨漁の繁栄に、夢をたぎらせ、網をたぐった男たちにとって、鯨番屋はまさに「御殿」にもみえたであろう。

実際、小樽市に保存されている鯨番屋(旧田中家)の外観をみても、往時の一端を偲ぶことができる。間口が四〇メートルを超える正面に立つと、右手にむくり破風の屋根をもつ玄関がある。七メートルを超える軒高と、深い前面の軒庇。その上に広がる切妻造トタン葺の大屋根と、ほぼ中央にそびえる入母屋造の屋根をもつ望楼に似た美しい煙出し。向かって右側の主人(親方)側の二階には腰高ガラス障子が整然と並び、左手の台所側には当時としては珍しい縦長の洋風はめ殺し窓がある。化粧板や化粧垂木などをみても、本格的な木造建築であり、全体に風格といったものを感じさせる。

内部に入ると、主人側の造りは質素にまとめられているが、反対側の漁夫たちの生活空間は、幾層にも重なり合った骨太の小屋根材が壮観ともいえる構成をみせている。かつて漁業主たちが、梁の太さを競った往時をかいまみることができるといえる。

北海道工業大学名誉教授の遠藤明久氏によれば、この鯨番屋は日本海沿岸地方に伝承された切妻造の民家様式に、北海道らしい洋風モチーフを巧みに調和させた、独特の意匠である。建築用材は、たもとど松、せんなど道内の樹木が中心だが、檜材などは道外から船で運ばせたという。また、面積は一階が二二五・三坪(四一四・二平方メートル)、二階は五八・四四坪(一九三・二平方メートル)にも及ぶ。復元作業の最初に、この移築後の旧田中家のみで、われわれプロジェクトチームの想像力は、一気に明治の昔へと飛躍した。かつてこの鯨番屋が泊村沿岸の海岸にあり、船倉をはじめとした倉庫群が建ち並び、最盛期には二二〇人を超えたというヤン衆の熱

岸に豪壮な鯨番屋を建設した。鯨番屋は、漁場の中心をなす建造物であり、漁業主の住居と多数の雇漁夫の居住空間とを複合した、特殊な漁家建築であった。また、木造建造物としてはあまり類のない大規模なものでもある。

当時、莫大な収益をあげた漁業主たちは、その資産と心意気とをかけて、鯨番屋の普請に力を注いだ。建築の規模や、梁や柱の豪華さを互いに競い合ったといわれている。のちに鯨御殿と呼ばれた由縁も、そこにあつたのであろう。

鯨が大量に押し寄せることを群衆というが、江戸時代には松前藩が支配する道南を中心に群衆があつた。それが時代を追うごとに次第に北上し、やがて



旧田中家・番屋全景(明治期、泊村照岸)



気に包まれていた当時の景観を、なんとか復元したいという情熱にかられたのである。

二、復元作業

全体配置について

昭和三十三年まで田中家の鯨番屋と付属建家があつた泊村照岸の敷地は、幅約三〇〇メートル、奥行きわずか五〇メートルに満たない、細長い海岸沿いにある。目の前は日本海、すぐ背後には樹木の生い繁る崖が迫り、山側を通る道路からは敷地の存在すらうかがうことができない。

そこには現在、母屋(鯨番屋のこと。この項では図面および他の建造物との関係で、母屋と呼ぶ場合がある)の一部と、石造の什器倉、木造の漬物倉、そして漁の安全と大漁を祈願した神社が残っているが、盛時の面影を宿すものはわずかしかない。浜辺

漁場は樺太へと移動し、ついには鯨は消えていった。田中家が漁業主として成功した明治中期は、ちょうど鯨の大群が積丹半島付近に押し寄せた時期でもあつた。こうして北海道の西海岸を中心に次々に建設された鯨番屋だが、昭和に入ると鯨の不漁によって漁業主が没落し、それとともに衰退の一途をたどり、昭和三〇年以降はまったく無用の存在となった。その間、各地に荒廃した姿をさらすものも数多く、鯨漁に一獲千金を夢みた男たちの盛衰を物語るだけの存在となり果てたのである。その中であつて、田中家の鯨番屋は北海道炭鉱汽船株式会社を買収して移築し、のちに小樽市に寄贈され記念館として現在に至っている。現存する鯨番屋の中でも、規模と外観の美しさでは、一、二といわれ、貴重な歴史的建造物として保存されている。

今回、大林組プロジェクトチームが挑んだテーマは、この旧田中家の鯨番屋が、明治三〇年に泊村照岸において創建された時の姿を復元することである。長い歳月の間には、家族構成や漁夫の人数の変化などによって、各所に改装がほどこされ、また移築時に欠落した箇所もあるものと思われる。そうした経緯を踏まえつつ、鯨番屋を中心とした最盛期の田中家の漁舎全体の姿を、誌上に再現したいと考えた。

一、移築された鯨番屋(旧田中家)の概要

鯨番屋は、建築史の中では、北海道独特の漁場における番屋建築として位置付けられている。番屋という漁業施設は北海道だけのものではないが、もとは江戸期の松前藩時代に交易所として設置された運上屋の祖先施設であつた「番家」が語源とされている。それがのちに漁業家の建物を呼ぶようになった。

しかし、数度にわたる現地調査と各方面から収集した資料の検討を繰り返すうち、鯨番屋の姿は少しずつ現実のものとなつていったのである。

まず、明治三〇年に鯨番屋を新築した当時、田中家の建造物群と作業場はどのように配置されていたのだろうか。この点を検討するため、昭和一五年と一八年に現地聞き取り調査を実施された遠藤教授にご教示をいただき同時に、関係資料の収集にあつた。その結果、田中家に関する歴史的資料(泊村役場)、前述した『図入北海立志編』(北海道大学)、明治期のものと推定される海側から田中家を撮影した全景写真(小樽市)、そして国土地理院撮影による昭和二十一年と五一年の現地の航空写真など入手することができた。

これらの資料に加え、什器倉など現存する付属建家の実測値および目測値とを比較検討することにより、田中家の各建造物の位置関係と規模については、その概要が判明した。しかし、写真はいずれも遠景であるため、個々の建造物の中にはどういう目的に使用されたか不明のものがあつた。また、水揚げした鯨から白子や数ノ子を取り、身欠き鯨をつくり、さらに鰯を生産するためには、釜場や干し場などの作業スペースを必要とする。これらの位置にあつたかは、写真からは特定することが不可能であつた。そこで現地の歴史や事情に詳しい、泊村第一地域会の峰谷寅雄会長、田中家三代目(市松氏)夫人である田中ナツさん、さらに昭和二〇年から船頭として働いていた八田芳雄氏の三氏にご協力いただき、

細部についての聞き取り調査をおこなった。

その結果、次のような配置であったと推定した。敷地中央の海岸に袋洞があり、その背後の石積みをした小高い地に、母屋、什器倉、米倉、神社、漬物倉が並んでいた。その東側に、続いて船倉、練干し場、網干し場、そして網倉があった。また反対の西側には練置場と船倉を兼ねたローカと呼ばれる倉庫と、魚坪(練置場)があり、その背後の山間部には雑倉と三棟の倉庫が建てられていた(配置図参照)。

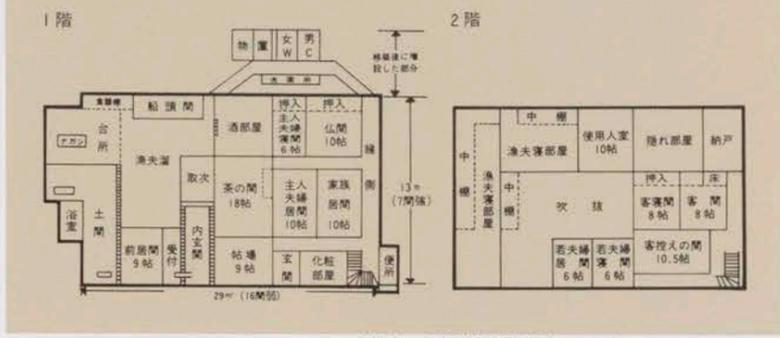
全景写真および航空写真をみると、中央部の什器倉の前浜に一棟の建物がみえた。これが何であるか不明であったが、聞き取り調査により、雇漁夫が増えた時の番屋(宿泊施設)として使用されたことが判明した。最盛期の漁夫数が一二〇人となると、宿泊施設は母屋だけでは不十分であり、この番屋の存在は必要不可欠といえる。

また、母屋の前面にある釜場(練を煮る設備)については、前述の『図入北海立志編』に掲載された田中家の絵図をみると、ずっと東寄りの神社の前に描かれている。しかし、作業工程上から考えて無理があり疑問に思っていたところ、やはり聞き取り調査から、配置図に示したように母屋の前面にあったことが分かった。

さらに、田中家の漁獲高から考えると、練の干し場が東側の船倉の前だけではいかにも小さすぎる。といって狭い敷地内にその場所を求めることができずに不審に思っていたが、これについては西側の崖上の平坦部に倉庫とともに広大な干し場があった、との話を聞くことができた。現在、ここは樹木の繁る山中であり、往時の痕跡すらない場所であるだけに、貴重な発見であった。また、この干し場のあった崖上への道が、現在は母屋の脇からの一本しかないが、全景写真をみるとローカの背後、雑倉の付近に通路らしいものがある。そこで、西側を迂回する道がもう一本あったと想定し、ここは崖地であるの

方をしたものであろう。

土間は現在、漁夫溜(板敷の生活空間)の西側だけにあり。しかし、一二人を超える漁夫がいたとすると、かりに前浜の番屋と分けて居住したとしても、相当数がこちら側で生活していたはずである。そうした漁夫たちへの賄いや、彼らの洗面スペースなどの使い勝手を考慮すると、土間はもっと広がっ



小樽市・北祝津・練御殿(旧田中家・番屋を移築したもの)

た可能性が高い。そこで、現在は漁夫溜の前にある前居間の部分も、かつては土間であったと推測し、下屋まで延長した。

また、土間の北西部には流しがあるが、田中ナツさんの話によれば、ここには裏山の岩をそのまま屋内まで取り込み、山からの引き水をしてきたとのことであった。狭い敷地を生かした興味深い作りであり、今回の復元図にも、その模様を描き入れている。

で棧橋状の通路を配置した。

一方、全景写真や『図入北海立志編』の絵図に示された前浜の作業スペースをみると、現状とはかなり異なっている点があった。前浜にはかつて、敷地を保護するための木柵や石垣が、ほぼ全面にわたって造られていた。それらはいずれも、現在は崩れ果てて位置が不明となっていたが、現地調査の際に浜辺を歩き、その痕跡である矢来丸太や石の位置を確認し、できる限りの復元を試みた。

明治三〇年創建時の田中家の練番屋を復元するにあたり、プロジェクトチームはまず、小樽市に移築保存されている旧田中家について詳細に検討することから始めた。この練番屋は、部分的な改装がほどこされてはいるが、多くの番屋建築が人知れず朽ち果てたり、ほかの営業施設へと全面的な改装を受けている中で、いままも明治の雰囲気を感じる重要な建築である。

また遠藤教授は、かつて田中家の二代目徳松氏より移築前の練番屋に関する聞き取り調査をされ、さらに移築保存された旧田中家の実測と図面作成も実施されている。それらの資料提供とご教示を受けながら、復元作業を進めた。

まず外観についてだが、現在の練番屋は屋根がトタン葺となつている。しかし、明治期には豊富な木材を屋根材にも使用していた例がきわめて多く、ここでは桎葺とした。

また、建物背面部へ回ると、柱が三尺間隔の高密度で配置されている。泊村照岸の立地をみると背後が崖であることから、崖崩れ対策用の工夫であったものと考え、そのまま採用した。さらに、二階の中棚(二段式の漁夫たちの寝床)と使用人部屋、その下の酒部屋付近の窓の取り付け高さが不揃いであり、窓廻りのディテールも異なっている。これは内部とも関連するが、漁夫や使用人の増加にともなう

土間脇には現在、風呂場が設置されている。これは改築によるものと思われたが、ではその空間がもとは何であったかが分からなかった。これについては、大正六年におこなわれた田中福松氏の葬儀の写真、のちに拝見することができた。その写真中、外側からこの部分を撮影したものがあり、物置ではなかったかと推定した。また、同写真から、台所のカママイ(籠)の上部に小さな煙出しがあったことも分かり、図面に採用した。

風呂場の位置は、今回、かなり困難をきわめた。明治期の漁村であることを考えると、漁夫たちは外で釜に湯を沸かし、汗や汚れを流していたとも思われる。しかし、家族や女衆には内風呂が必要であったろう。容易に確定できなかったが、現在は物置となつている北西のはずれの位置が、台所や便所など水関係に近いことから自然であると判断し、そこに設定した。

なお、窓のガラスは、当時のガラス一枚の大きさは半紙判(縦二五センチメートル×横三四センチメートル)が普通であったといわれる。しかし、大正六年の写真を見ると、すでに大判ガラスを使用しており、ここでは当初からそうであったものとした。

最後に、復元作業の過程で気付いた興味深い点を紹介しておきたい。そのひとつは、小屋裏の隠れ部屋の存在である。二階奥の間の壁から抜け道が通じ、一二畳大の隠れ部屋へ上がることができる。これは、当時の孤立した環境と物騒な世相(強盗、よその漁夫とのめ事など)に対処するため、緊急の避難場所として用意されたと思われる。

もうひとつ目立つ点は、大きな神棚と仏壇である。二階の茶の間東側には一間半の神棚、また奥の仏間にもやはり一間半の仏壇がある。練漁は自然を相手の浮沈の激しい漁であるだけに、漁業主には信仰心の厚い者が多かったのは当然であろう。豊漁と漁の安全を願う気持が、その大きな神棚や仏壇にあらわ

部屋の増築(大正元年に使用人部屋を増築している)の際に、新しい窓がつくられたものと考えられる。したがって当初は、北側の窓数は現在より少なかったものと判断した。

次に内部だが、一般的には練番屋は中央部に通り庭(土間)があり、その左右に主人(親方)側と漁夫側が分離された形態が多い。たとえば、留萌に保存されている有名な花田家番屋(重要文化財)などもそうになっている。しかし、田中家の場合には分離されておらず、主人側と漁夫側が隣接した間取りとなっている。T.E.M.研究所の真島氏のように、これは練漁の初期にみられる家族的経営の名残ではないか、との見方もある。

内部については、柱や梁の取り付け位置、柱のほぞ穴などをチェックし、同時に聞き取り調査などで得た情報を比較検討しながら、明治期にふさわしい姿を求める方法をとった。とくに柱にほぞ穴の残る箇所が随所であり、これらが創建時の建築と関係あるかどうかの判断には困難をきわめた。

こうした調査と検討の結果、明治三〇年の田中家の内部を次のように復元した。

漁夫の寝床である中棚は、北側のみとした。また、現在はかなり幅広の中棚となっているが、一階と二階では柱位置が通っていないことや、床梁の断面が途中から小さくなっているなど、構造的に不自然な点があり、のちに付け足したものと考えられる。そこで中棚の幅を一階の柱位置まで後退させ、狭くした。

自家製のどぶろくを置いたという酒部屋の二階には、現在は使用人部屋がある。これは大正元年に増築された部屋であり、ここではなかったものとした。玄関脇の帳場(事務室)は、現状では九畳大の大きな部屋となっているが、以前の遠藤教授の調査では現状より小さかったことが分かっている。そこで六畳大に縮小したが、土間寄りの柱に鴨居を取り付けた跡がみられないことから、かなりオープンな使

れている。

こうして復元した練番屋をみると、間口四一・四六四メートル、奥行二一・二三八メートル、面積は一階だけで約五〇〇平方メートルにも及ぶ大規模なものである。『図入北海立志編』には、完成まで四年余を要したと記されているが、立地、製材技術、施工方法、さらに費用などを考えると、当時としては相当に大掛かりな建築であったといえるだろう。

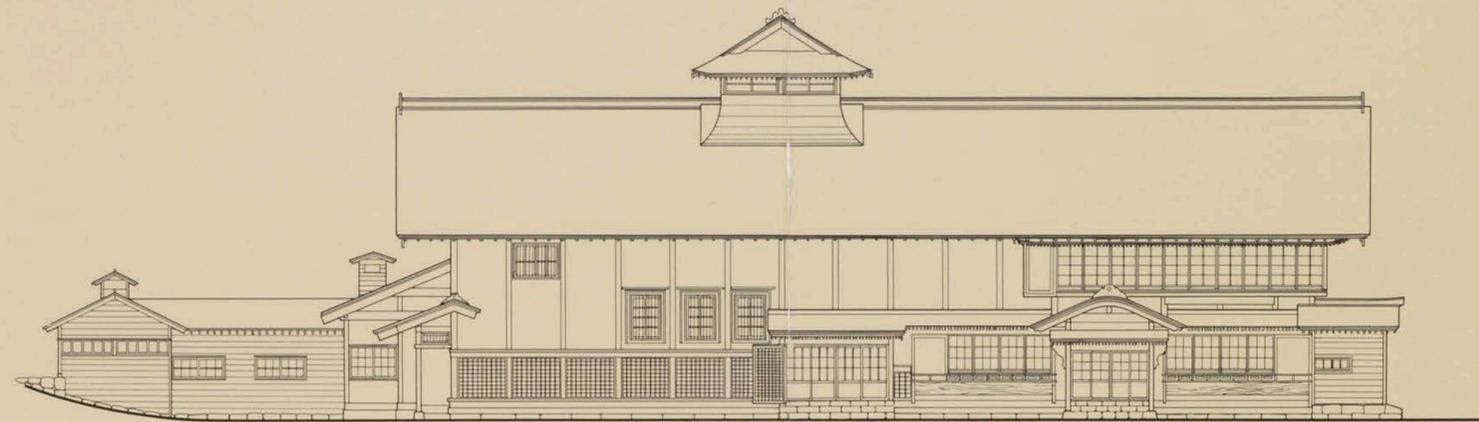
この練番屋が、山を背負い海に臨む照岸の地にあった姿を想像すると、壮観の一語に尽きる。早春とはいえまだ雪の散り飛ぶ二月から三月にかけて、多くのヤン衆がここに集い、わずか二カ月間の漁にすべてを賭けて闘う。一年の吉凶が、そこに集約されているのである。練番屋は、その激しさと哀しさが表裏一体となった練漁によく似合う、迫力と美しさをもった建築物である。

作業を終えて

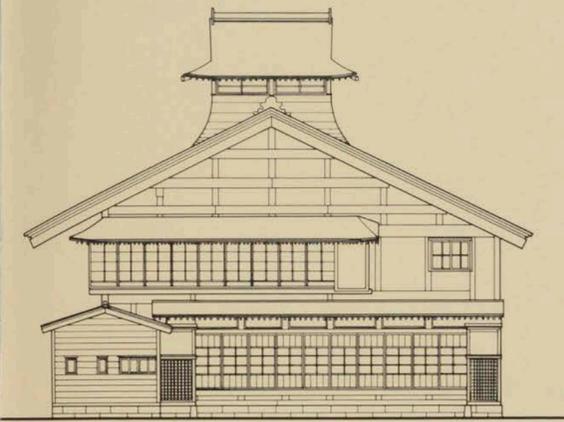
ゾーラン節にも唄われた練漁のことは、誰でもが知っている。けれども、わずか数十年前まで活況を呈した練漁の生きた姿を想像してみる時、われわれは何も知らないことに気付く。今回のプロジェクトチームもまた、ゼロからの出発であった。ローカ、ナツポ(魚坪)といった独特の用語に悩みつづ、泊村の現地や移築された旧田中家を訪れ、疑問をひとつずつ解決していくうちに、いつしか全体の姿が陽炎のように立ち上がってきた、というのが実感である。T.E.M.研究所の産産復元と合わせ読み、読者が練漁の生きた姿を想像する手助けとなれば、どれほど素晴らしいことであろう。

建築復元に協力いただいた遠藤久教授、田中ナツさん、蜂谷真雄氏、八田芳雄氏、北海道大学、小樽市役所、泊村役場、北海道開拓記念館をはじめ、多くの方々にお礼申し上げます。

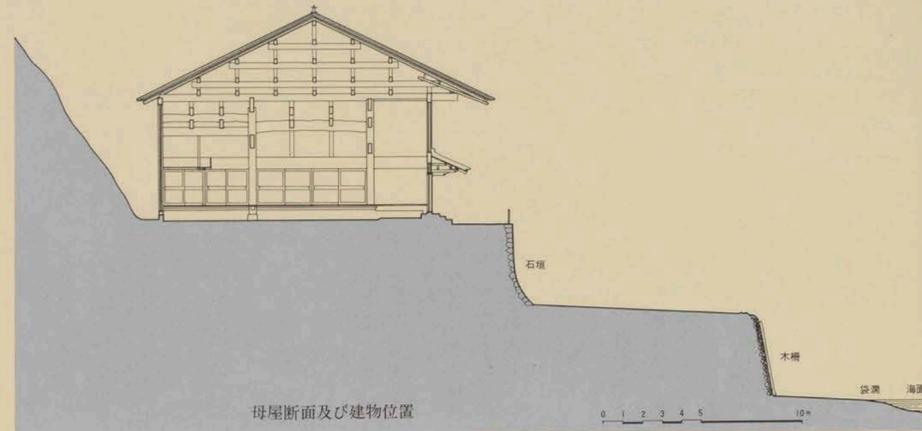
(なお、産産復元の章では、前浜の番屋をローカとし、ここでローカとした建物を柏倉と解釈している。建築復元の内容とは一部異なるが、本誌では各々の解釈をそのまま提示したことをお断りしておきたい)



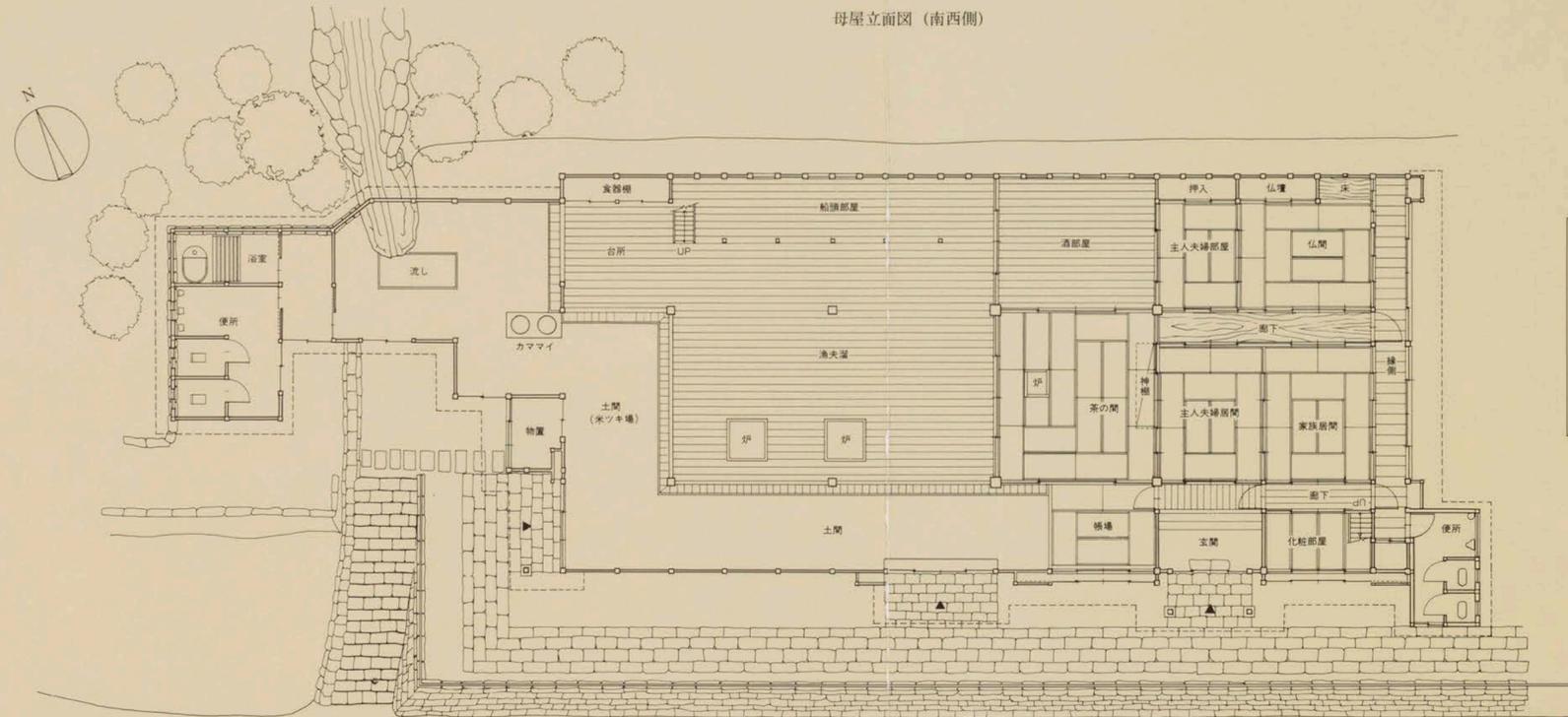
母屋立面図(南西側)



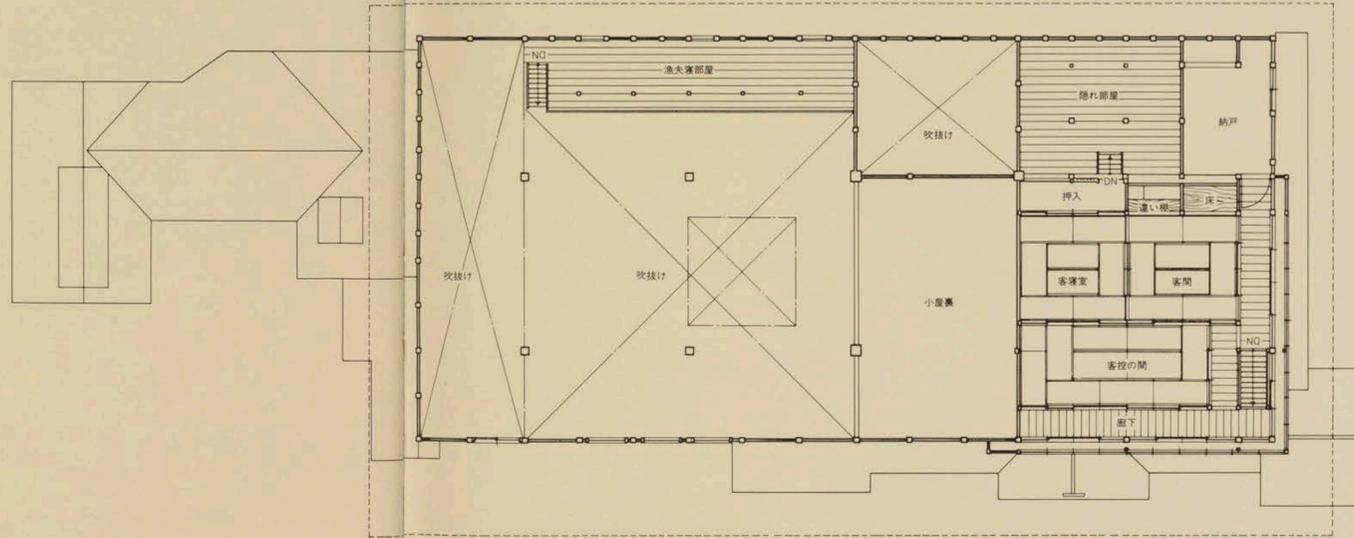
母屋立面図(南東側)



母屋断面及び建物位置



母屋1階平面図



母屋2階平面図

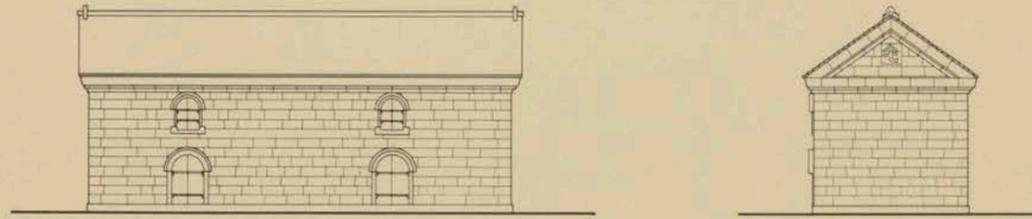


旧田中家・番屋配置

付属全建物①

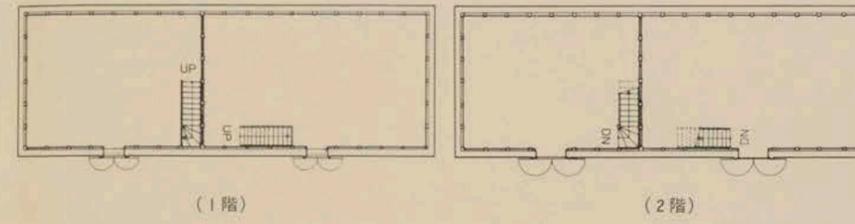
立面図

什器倉 (石造)

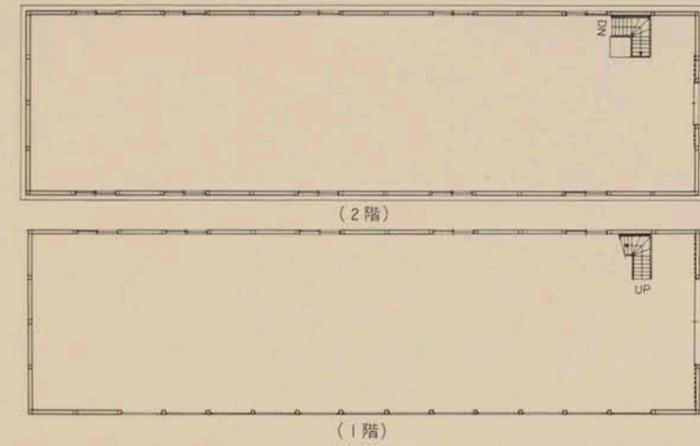
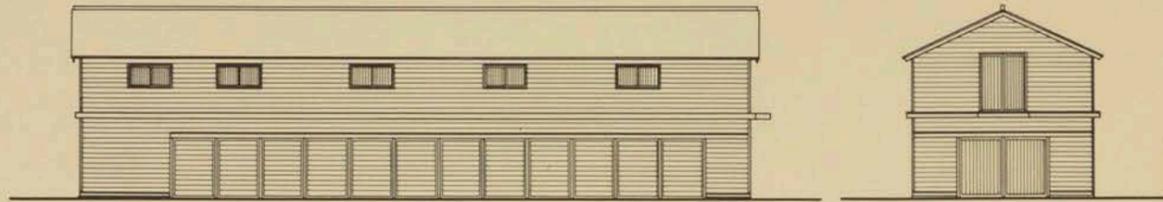


平面図

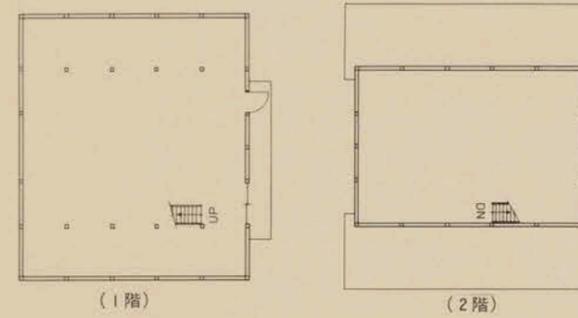
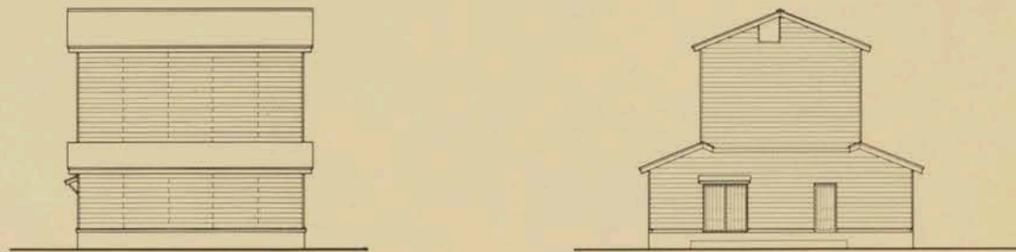
断面図



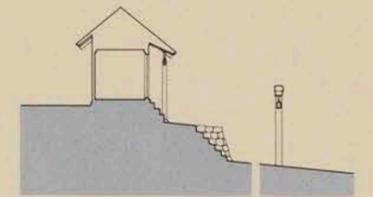
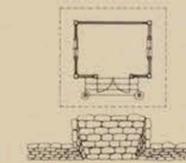
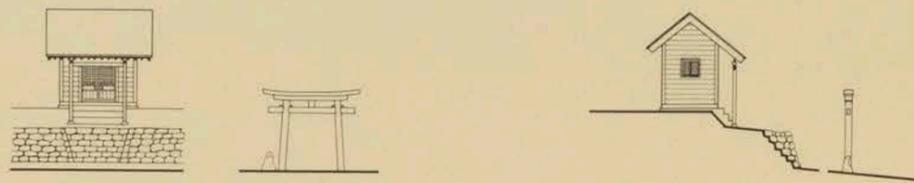
口一カ



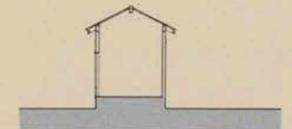
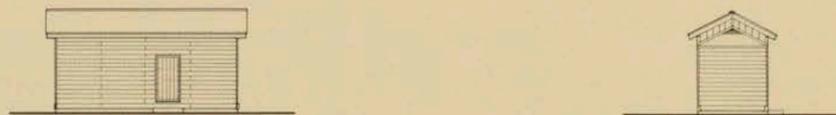
米倉



神社



漬物倉

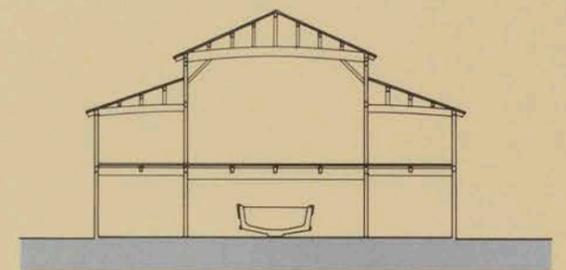
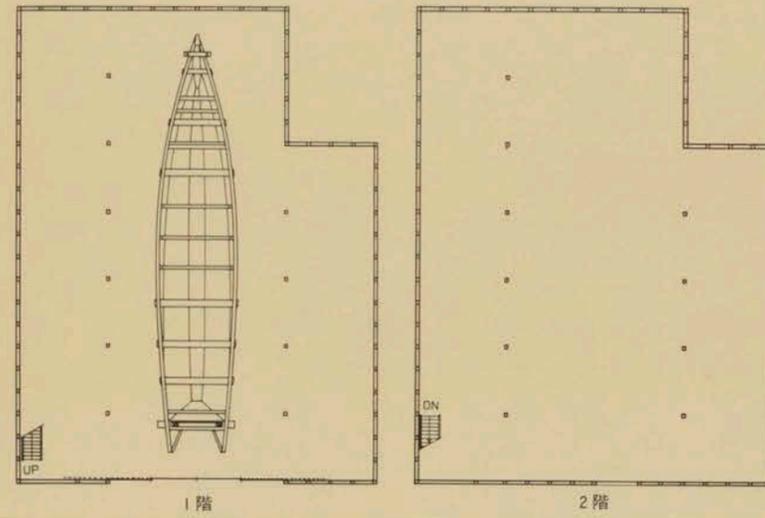
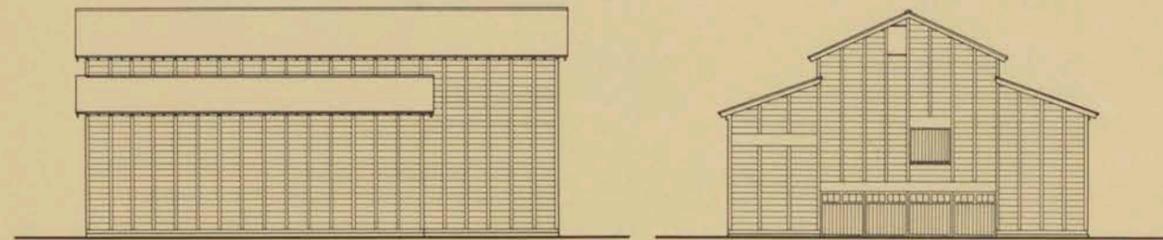


立面図

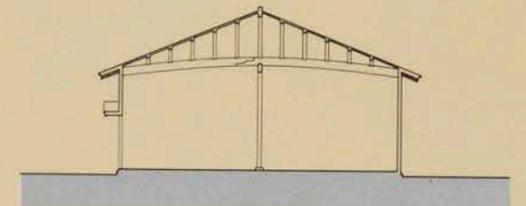
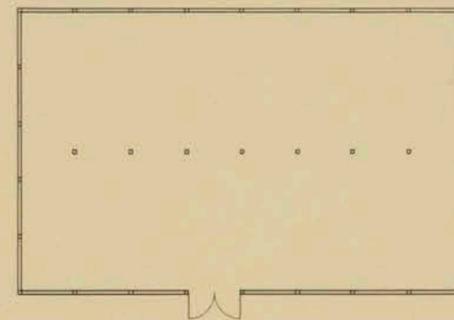
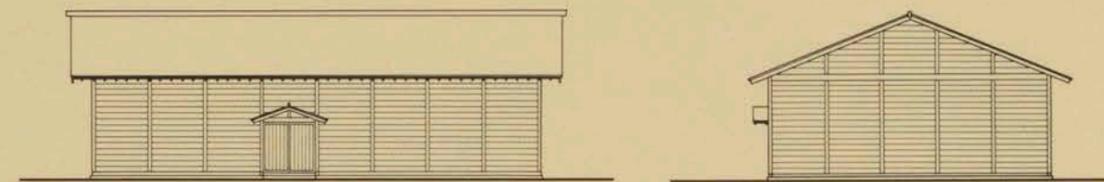
平面図

断面図

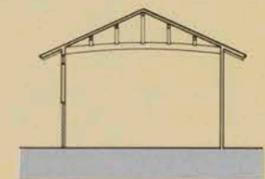
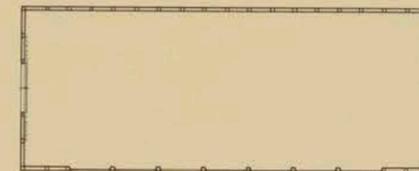
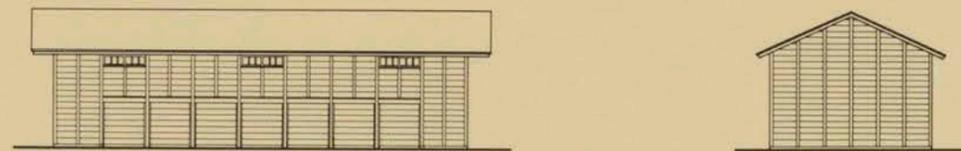
船倉



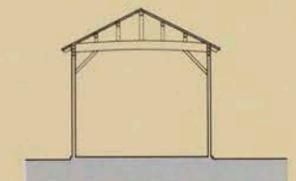
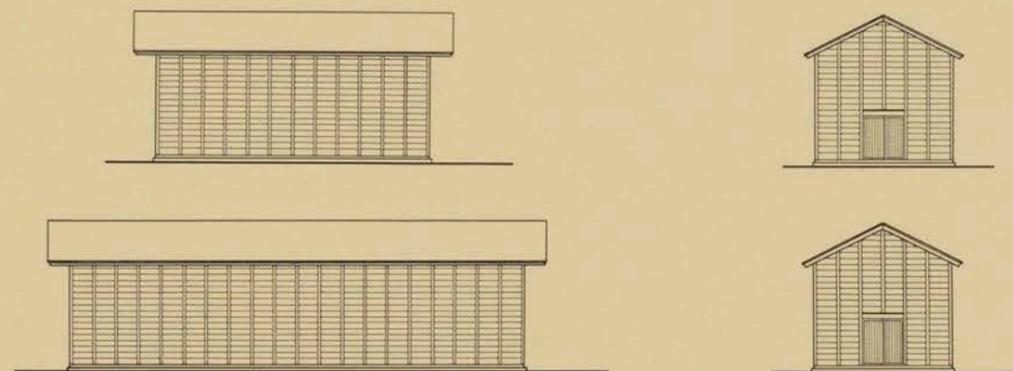
網倉



番屋



倉庫



付属建家の復元
 付属建家に関して、少し述べておきたい。全体配置の項でも紹介したが、泊村沿岸には鱈番屋(母屋)のほか、番屋、什器倉、米倉、漬物倉、神社、船倉、網倉、ローカ、雑倉、倉庫などの建造物があった。これらの規模については、現存するものは実測と目測を実施し、それ以外は写真に基づく計測をおこなった。神社の鳥居にいたるまで、田中家のすべての施設について復元した。
 このうち規模の大きな建造物としてはローカがある。ローカは、陸上げた鱈を女衆がモッコで運び、積み上げていく場所である。また、漁が終わると大型船を運び込み、収納する場所ともなる。そのため、屋根頂部までの高さ七・五メートル、開口七・二七メートル、奥行二七・二七メートルという長大な作りであり、一階部分の大半は板戸によって開放することができるようになっている。
 船の収納庫としては、ほかに船倉がある。この船倉は、平面が長方形ではなく、北東部分が短くなっており、航空写真で最初に見た時からその特徴が目立った(配置図参照)。おそらく、山がすぐ背後に迫る地形から、この形になったものであろう。なお、この船倉は別地に移築され、現在も使用されているそうである。